

学長の業績評価について

(評価期間：令和2年4月1日～令和3年3月31日)

令和3年8月

学長選考会議

令和3年度 国立大学法人茨城大学 学長業績評価 総合評価書

総評	総合評価
	4.0

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各評価を集計し、その平均が総合評価となる

評価コメント
<p>○前学長から引き継いだタイミングでコロナ禍の緊急事態に遭遇することになったが、従来からの学内の着実な取組も生かされて、堅実に乗り切っていると評価できる。大きな課題を抱えているわけではないが、教育研究費の充実のために、引き続きリーダーシップを発揮していただきたい。</p> <p>○非常時の大学運営、お疲れ様でした。全ての面にわたり努力の跡が見られ、すばらしいパフォーマンスができたことを高く評価する。</p> <p>○学長の所信表明における基本方針が、イバダイ・ビジョン2030に具体的に定められたことにより、大学の教育、研究、地域連携・グローバル化、大学運営の各分野における明確な目標と課題が決まった。今後の成果が期待される。</p> <p>○期待する程度を上回っている。第4期中期目標、イバダイ・ビジョン2030の達成にむけて教職員との対話をより一層深めて大学運営を行うことを期待する。</p> <p>○コロナ禍の厳しい環境の下、様々創意工夫され、総じて期待する程度を上回っている。今後、アフターコロナを見通し、新しい大学づくりに、更なるご尽力をいただきたい。</p> <p>○コロナ禍の対応は、学長のリーダーシップの下、教職員や学生の総合力を示したもので、大いに評価できる。令和2年度の業務も十分な実績を収めた。</p> <p>○期待する程度を上回っていると考えられる。コロナ禍において難しい大学運営となっているが、オンライン授業体制の確立の他、様々な施策により良く運営されている。コロナ禍後も見据えた運営を期待したい。</p> <p>○コロナ禍でありながら、できる限りの取組や今後の改革の準備が進められたと思われる。COVID-19沈静化後にこれらの取組や準備が教職員一丸となって進められ、目標到達の成果として現れることを期待している。</p> <p>○第4期に向けた道筋を示すイバダイ・ビジョン2030の制定や、全学の教職員・学生とのコミュニケーション強化をはかっている点、更に地域とのつながりの強化に尽力している点は評価するが、業績としてはもう少し先にならないと判断できない。</p> <p>○1年目なので評価は難しいが、スタートの時点からコロナ禍という不利な条件下にあったにもかかわらず、比較的順調な大学運営がなされた。ただし、財政難を克服する見通しは厳しく、特に教教分離が順調に進むかが鍵となると思われる。</p> <p>○システムを含めた組織運営はすべての分野のインフラであるため、不断にその運営の改善を心掛ける必要があり、また各分野の取組はそうした認識を共有したうえで行うことが重要である。</p> <p>○COVID-19対策のために、この1年半は時間を取られたために期待した以上の成果は出ていないと思われる。イバダイ・ビジョン2030は今ひとつ総花的であり、茨城大学ならではの方向性が見えてこない。今後、茨城大学としての具体的な方向性を示していただきたい。さらに、今後変革を迎える大学や高等教育の将来的な方向性も示していただきたい。</p>

教育	4.7
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○COVID-19対応のオンライン講義の環境構築は見事。学生の満足度が高い点が評価できる。</p> <p>○コロナ禍の制約された環境の下、的確、迅速な対応をされている。特に、オンラインによる遠隔授業や国際交流プロジェクトでは、学生の満足度も極めて高く、大きな成果を出している。</p> <p>○コロナ禍にもかかわらず、いち早く遠隔授業の体制を整え、授業を受講した学生たちの満足感を前年度よりも高めたことは高く評価できる。</p> <p>○卒業時のディプロマ・ポリシー達成につき、高い評価を得ていること、及びCOVID-19の各種対応は修学者の十分な理解と満足を得るに至っていることは大いに評価する。</p> <p>○コロナ禍の中、FDを十分に行い、遠隔授業をスムーズに実施。更に遠隔授業の効果をいち早く検証し、有効性を確認するなど、教育の質の改善に努めた。生活困窮学生には独自の経済支援を行った。非常時に茨城大学の底力を発揮したと言える。</p> <p>○大学教育再生加速プログラム事後評価で「S」を獲得するなど大学教育の質的転換が進んでいる。ディプロマ・ポリシーの達成度も学年があがるごとに向上しており、ディプロマ・ポリシーが全学的に浸透してきている。それが新たな教育プログラムに結びついていくという好循環が生まれることを期待したい。</p> <p>○コロナ禍にもかかわらず、全学的にオンライン授業をほぼ順調に実施できたことは大きな成果と言える。直接教育に関わることではないが、学生への経済支援は重要かつ適切な対応であった。</p> <p>○コロナ禍においてオンライン授業でスタートした令和2年度であったが教育の質を落とさずに、むしろアンケートでは学習効果があがっていることから状況に応じた教育ができたと考えられる。それらの取りまとめを学内外にアピールできた。iOPコンペなどの実施も評価できる。今後、iOPやアントレプレナーシップ教育プログラムなど学生の主体的取組を更に支援し、その成果を学内外にアピールしていただきたい。</p> <p>○COVID-19により遠隔授業のノウハウが格段に進んだが、大きな問題もなく、逆に教育の満足度と質においては維持向上を示唆する結果まで得られており、学生及び教員への大学としての指導体制にばねがあることがうかがわれる。これら教育のノウハウが今後の教育の質の更なる向上に生かされるよう期待している。</p> <p>○コロナ禍においても、オンラインの利用などで必要な教育はおおむね確保された。そこで得た教育方法の活用を推進してほしい。</p> <p>○COVID-19の蔓延への全学的対応および学修成果をデータとして明確に示した点は評価する。ただし、令和2年度の新入生に対してはもっと早い段階で対面を果たす機会を作っていたら良かった。</p> <p>○COVID-19対策のために、この1年半は時間を取られたために期待した以上の成果は出ていないと思われる。特に、データサイエンス教育に関しては他大学に比べて取組が遅れている。また、コロナ禍以降の教育への取組を検討しているのか確認していきたい。</p>

研究	3.9
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○茨城県地域気候変動適応センターの水稻への影響報告書、地球・地域環境共創機構の研究活動はいずれも大いに評価できる。</p> <p>○研究費の業務経費全体に占める割合が同規模大学の中でわずかながら低い。近年、外部資金獲得の件数、金額が良い傾向にあるので、引き続き努力を続けてほしい。</p> <p>○地域の企業、自治体などとの共同研究に積極的に取り組んでいる。今後、地元還元できる研究成果を期待したい。</p> <p>○感染予防により、学内立ち入り禁止期間が続いたことで、実験系の卒論や修論の作成に困難な状態があったと推察される。外部要因によるものであるが、学生たちも大変であると思われるので、指導教員による指導やケアを工夫していただきたい。外部資金の獲得を伸ばしたことはすばらしい成果である。</p> <p>○茨城県地域気候変動適応センターによる報告書を取りまとめ、国レベルの報告書に引用されるなど、課題解決に貢献。また、ノーベル賞級の研究にも取り組んでいるということであり、成果を出して、チバニアンに続き、茨城大学の名を高めてほしい。</p> <p>○地球・地域環境共創機構が令和2年度気候変動アクション環境大臣表彰を受賞したことはすばらしい。</p> <p>○研究マネジメントに取り組む一方で、運営費交付金の共通指標にカウントされない学問や方法がないがしろにされないか懸念する。</p> <p>○第3期を支えた特色ある研究を今後も引き続き支援いただきたい。</p> <p>○研究・産学官連携機構を通じて各学部の研究関連の数値目標をPDCAサイクルによってあげる検討が進んだことが評価できる。共同・受託研究の件数と金額があがったことで結果が見えている。</p> <p>○茨城大学の主力となる研究への大学としてのバックアップ強化などが図られ、計画が着実に進められていると思われる。</p> <p>○研究推進の体制は整備されてきているが、成果については1年目なので不明。SDGsに関わる全学的な取組についての見通しが示せると良い。</p> <p>○COVID-19対策のために、この1年半は時間を取られたために期待した以上の成果は出ていないと思われる。</p>

地域連携

4.1

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

- 民間、行政など様々な主体と積極的に連携プロジェクトを展開している。特に、今年から茨城県と連携して行うアントレプレナーシップ教育プログラムに大いに期待している。
- 自治体、企業等と種々の連携協定が結ばれ地域連携は確実に強化されている。
- COVID-19の影響で、外部との交流や連携が難しく、学生たちの体験の場が十分に作れなかったのではないかとと思われる。それを補う何かを考えてほしい。
- 地域企業・自治体との共同研究、連携に関しては、その為の基盤は整備されたが、その成果は期待する程度を上回ったとの評価まで。
- 茨城県経営者協会と新たな研究プロジェクトを開始するなど、東京を除く関東地方ではトップクラスの産学連携、自治体との連携を進めている。
- リカレント教育においてコロナ禍の中で、カスタムコースが後期のみオンライン開催となるなど残念なところはあったが、着実に進んでいる。茨城県と連携したアントレプレナーシップ教育プログラムや茨城県経営者協会との共同プロジェクト「Joint結」に期待したい。
- 企業や自治体との様々な面での協定が結ばれ、同時に共同研究も進められ、比較的順調であると言える。
- 新たな連携協定の締結や事業委託の獲得などは評価します。
- COVID-19により学外活動を思うように実施できない難しい状況ではあったが、県内自治体との連携協定を進めるなど、できる限りの計画の遂行がなされたと思われる。
- コロナ禍において工夫のうえでできるものを行った。
- COVID-19対策のために、この1年半は時間を取られたために期待した以上の成果は出ていないと思われる。前学長時代の延長でリカレント教育は進んでいるが、人生100年時代のリスク教育への対応についても検討しているのか確認していきたい。

国際交流

3.4

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

○リアルな国際交流が困難な中、オンラインを使った交流等の機会を作るなどの配慮が評価できる。

○オンライン国際交流の実施は今後も期待される分野であるし、日越大学の取組なども1期生の研究発表がなされ、一層の効果が期待できる。

○コロナ禍でリアルな国際交流が困難な中、オンライン短期研修に参加したり、つながろうプロジェクトを実施した。COVID-19の収束後も、リアルな交流に加えてオンライン交流を活用してほしい。

○コロナ禍において、派遣の中止や延期を余儀なくされたことは残念であったが、オンラインによる交換留学プログラムや短期海外研修を立ち上げ、協定校と連携する他様々な交流プロジェクトの取組ができたことは評価できる。

○コロナ禍においてもオンラインを活用して国際交流は推進されているが、学生アンケートによるディプロマ・ポリシー達成度のうち実践的英語力の伸びが鈍いので英語教育と国際交流を結びつけるような展開が必要ではないか。

○コロナ禍の厳しい環境の中、オンライン交流など種々工夫を重ね、取り組んでいる。

○コロナ禍において工夫のうえでできるものを行った。

○コロナ禍による制約にもかかわらず、様々な取組がなされているが、直接の人事交流が制限されているので、影響は免れない。

○COVID-19の影響で十分に実施できなかった点はやむを得ないが、結果として現時点では前任者の継続にとどまっていると判断せざるを得ない。ただし、オンライン交流の開拓などが行われていることから、ポストコロナでの展開に期待したい。

○COVID-19の影響で国際交流は地域連携以上に活動実施が難しい状況ではあったが、ネットなどを最大限活用した交流も試みられ、今後の新たな国際交流のあり方が見出された点は評価できる。ただし、学生全般の国際意識のベースは依然として低く、新たな取組が望まれる。

○COVID-19によるパンデミックは国際交流に関しては致命的であった。今後は茨城大学としてどのような国際交流を重視していくのか明確な方向性を示していただきたい。

大学運営

3.8

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント

○コロナ禍の中で、積極的にできることにチャレンジし、大学全体を巻き込みリードしたことは、高く評価できる。

○一般管理費は、歳出削減の努力により、国立大学法人評価委員会の評価でも優れた点として特記されており評価できる。人件費全体の業務経費に占める割合が、同規模大学の中でわずかながら高いので、中長期的課題として、改善の努力を期待したい。

○大学運営を客観的に評価、検証する様々な体制が構築され、その透明性の向上に取り組んでいる。

○イバダイバの創刊による学内コミュニケーションの向上が期待でき、かつ内部質保証委員会の設置は大学全体のモニタリングによる自己点検・評価が期待できる。

○学内コミュニケーションは年度計画を上回って実施するなど、成果を上げている。女性や外国人教員の割合を増やすなど、引き続き学内のダイバーシティにも取り組んでほしい。

○財務面は厳しいが、外部資金の獲得等成果が出始めている。茨城大学基金を活用したコロナ禍における学生に対する緊急の奨学金制度を設けるなど、緊急時学生支援パッケージの活用は有効だった。

○学内の情報共有への努力は評価できるが、通達等の系統にはまだ縦割りが残っているように感じる。財務についてもただ締め付けるばかりではなく、戦略的に投資することも考えていただきたい。

○所信表明からイバダイ・ビジョン2030によって大学の方向性が教職員に浸透してきた点が評価できる。

○COVID-19により遠隔授業を強いられたが、教育の質保証などの学内システムの構築も含め教育面では大きく前進があり、特に評価できる点だと思われる。

○コロナ禍でそれぞれが尽力したが、コロナ禍以前からある、縦割りの弊害、手段の目的化などの問題が顕著になり、改善が望まれる。

○大学執行部を中心に全学的な改革課題に積極的に取り組んでいるが、一度に手を広げすぎている感もある。ポイント制のもとで昇進が滞っており、教員のやる気への影響が心配である。

○COVID-19対策のために、この1年半は時間を取られたために期待した以上の成果は出ていないと思われる。教員からは「学長、大学執行部からの情報が少なくなった。」との声が聞かれるため、イバダイバの他に、学長だよりを復活する必要があると考える。

学長選考会議委員

職 名 等	氏 名	備考
学校法人目白学園 理事長	尾 崎 春 樹	※任期
茨城県 副知事	小 野 寺 俊	
茨城キリスト教大学名誉教授	川 上 美智子	
学校法人茨城 理事長 種田・鈴木法律事務所 弁護士	種 田 誠	議長
株式会社茨城新聞社 代表取締役社長	沼 田 安 広	
株式会社筑波銀行 代表取締役会長	藤 川 雅 海	
人文社会科学部長	内 田 聡	
教育学部長	荒 川 智	
理学部長	田 内 広	
工学部長	増 澤 徹	
農学部長	戸 嶋 浩 明	
全学教育機構長	西 川 陽 子	※任期

- ・ 学外委員は五十音順
- ・ 任期：令和2年4月1日～令和4年3月31日（選考会議規則第4条）
（備考 ※任期：令和3年4月1日～令和4年3月31日）